中国の旅から

「紫禁城」雑感

菊地　勉

成田空港を飛び立って四時間十五分、悠久五千年の歴史を持つ中国大陸を眼下に見下ろすと、大地は果てしなく広く、一面の黄土に覆われていた。その黄土の中央に、ひときわ幅広く濃い灰色をなして蛇行する帯状の地形が見えた。それは人類が最古の文明を築き上げる源をなした黄河そのものであった。

蛇行する帯状の流れは視界を横切って限りなく続く。三万フィートの上空からでさえ、その始まりと終りを見せない雄大な姿に、軽い身震いを覚えたのが、最初の中国の旅への始まりであった。まさに果てることのない陸地が描き出す、脈々と流れる五千年の歴史に昔日の面影を残す中国こそ、無限の興味を抱かせるものであった。

今回の中国への旅の目的は、平成三年の春にテレビ朝日で放送を予定しているスペシャル番組「紫禁城」制作のための予備調査と中国国家文物事業管理局（日本の文化庁にあたる）との交渉のためである。

北京飯店に着き旅装を解く間もなく、文管局迎えの張先生について故宮博物院に向かう。中国の明、清両王朝時代の皇居であり、ジョン・ロン扮する映画「ラスト・エンペラー」で一躍その名を馳せた紫禁城のことである。

紫禁城の完成は千四百二十年頃と言われているから、今を遡ること約六百年前になる。当時、明の都は南京にあったが紫禁城の完成と共に北京に移り、それ以来、明、清両王朝合わせて二十四代の皇帝がここに君臨したのである。その建築規模は大きさから言って、世界に並ぶものがないといわれている程のスケールで、訪中の度に足を運んでいるが、未だにその一端すら把握出来ない始末である。それもそのはずで敷地面積は七十二万平方メートルを越え、東京ドームの約十五倍の広さを持つのである。その上、宮殿は奥深く十重二十重の壁を巡らせているのであるから、実に神秘的で、又、かたくなまでに人を寄せ付けない威厳さえ感じさせて聳え立っている。

現在、紫禁城は一部博物館として一般公開されているが、その展示物は皇帝、太后、妃嬪達、あるいはそれらに連なる人々が使用した調度品が多く、当然とは言え極上の品々ばかりである。彫り物、塗り物、飾り物、書画の全てに高い芸術性を感じさせて驚くばかりである。

故宮博物院の見学は本来、建物のドア越しかガラス戸越しである。しかし今回は仕事の性質上、博物院に勤務する清朝専門の歴史学者徐先生の案内で幸運にも建物の内側からの見学であった。いかにも温厚な人柄の徐先生の丁寧な説明を受けながら、過ぎた日の出来事や、そこに生きた人々の吐息が聞こえるような至近距離での見学は、誠にもって感激の極みであった。

紫禁城は外朝と内廷の二大部分からなっており、外朝は主に重要な式典が執り行われたところである。皇帝の即位式や婚礼、誕生日

の祝事などである。又、内廷は皇帝や皇后、妃嬪などが日常生活をしていたところである。

正門である午門を入り、五本の橋で作られている金水橋を渡り、壮大な太和門まで約七、八分歩くと外朝を代表する太和殿である。太和殿は主殿としての風格をそなえて、見る者を圧倒する。内部は眩いばかりの金色に輝く蟠龍模様の玉座に龍の屏風、そして玉座の両脇にある龍を絡ませた柱など、全て金の漆を施したものである。玉座の真上の天井には、金漆の蟠龍が口に銀白色の大きな珠をぶらさげて躍っている。驚くばかりに贅を尽くした装飾である。此処で一体どのようにして式典が挙行されたのか、現実離れしたその華麗さは想像を絶するばかりである。しかし今その玉座には皇帝の姿は無く、ただ権威の絶大さを誇示するに相応しい品格で、過ぎ去った日々を振り返っているような静けさで置かれていた。安泰であったであろう皇帝と悲運に泣いて去ったであろう皇帝の歴史の無情さを感じたのは私の思い過ごしであろうか。

内廷では、かの有名な西太后が垂簾の政を行なったという養心殿と、西太后が起居し五十才の誕生日を迎えて、盛大にそれを祝った儲秀宮が、とりわけ印象的であった。儲秀宮は宮殿記録に基づいて、西太后存命当時の調度品を選び、陳列しているという。ここも又、贅を尽くした豪華さで、西太后の栄華を極めた生涯を偲ばせるものであった。西太后（一八三五～一九〇八年）は清朝第九代皇帝咸豊帝の妃である。咸豊帝は即位直後から、太平天国の乱や第二次アヘン戦争に直面して、多事多難な生涯を送り三十才で病没した。その後、西太后が実子の同治帝を六才で即位させるが、同治帝も早世する。すでに政治の実権を握っていた西太后は、強引に甥の光緒帝を即位させ摂政となった。巷間伝わっている垂簾の政は、まさに、この幼い二人の皇帝の後ろにあって行われたものであり、清朝末期の約半世紀の中国を事実上支配したのである。きらびやかな調度の中で思う存分権力の上に生きた女帝のすさまじさを垣間見たような気がする。又、西太后を偲ばせる養心殿では、宣統帝溥儀が清朝最後の皇帝として、ここで「退位詔書」に署名したのである。その部屋に案内されたが、五百年もの間続いた、紫禁城の終焉を告げる劇的な瞬間を迎えた此の場所に、今自分が立っているのかと思うと、殊更に感慨深いものがあった。更に、交泰殿玉座の右側に置かれた大自鳴鐘の名を持つ大時計（一七九八年製造）がいまだに動いているのには、非常な驚きと同時に感動さえ覚えた。時が流れ、人は去り、物だけが残った紫禁城の中で、たゆまなく時を刻み続けている大自鳴鐘。ジョン・ロン演ずるラスト・エンペラーが、あの玉座からふいっと立って、歩いて来るような錯覚すら起こしそうな、彼の時代との同時感を味わったような気がして立ちすくんでしまった。何度かの激動の時をくぐり抜けて、生き延びてきた紫禁城は過去の文化遺産として、我々の知らない中国を語りかけてくるようにおもえてならない。それが必ずしも民衆にとって、良い時代であったかどうか知る良しもないが。

十数度目の中国への旅は紫禁城に心を残して終った。そして、紫禁城とそこにある展示物の真の姿をテレビを通じて、いかに正確に伝えることが出来るか、大きな課題を持って北京を後にした。

黄土の大地を飛び立ったJALのジャンボ機は、少々の仮眠の後に、灯りにきらめく東京の上空を飛んでいた。北京一週間の旅であったが、東京の明るさはまばゆかった。